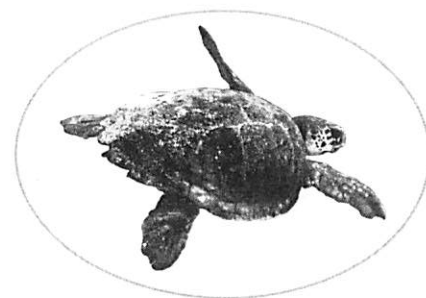


# ウミガメの自然誌

Natural History of Sea Turtles in Japan

産卵と回遊の生物学

亀崎直樹 編



東京大学出版会

- Turtle Cooperative Research and Management Workshop. Vol. II: North Pacific Loggerhead Sea Turtles. pp.27-29. Western Pacific Regional Fishery Management Council, Honolulu.
- Thorbjarnarson, J.B., C.J. Lagueur, D. Bolze, M.W. Klemens and A.B. Meylan. 2000. Human use of turtles: a worldwide perspective. *In* (Klemens, M.W., ed.) Turtle Conservation. pp.33-84. Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.
- Tomillo, P.S., V.S. Saba, R. Piedra, F.V. Paladino and J.R. Spotila. 2008. Effects of illegal harvest of eggs on the population decline of leatherback turtles in Las Baulas Marine National Park, Costa Rica. *Conservation Biology*, 22: 1216-1224.
- Turtle Expert Working Group. 2000. Assessment update for Kemp's ridley and loggerhead sea turtle populations in the Western North Atlantic. NOAA Technical Memorandum NMFS-SEFSC-444.
- 内田至. 1976. 菅野氏の観察記録を読んで. *自然保護*, 174: 26.
- 渡辺国広・清野聡子・宇多高明. 2001. 海浜部における海岸堤防建設がアカウミガメの産卵に及ぼした影響. *海洋開発論文集*, 17: 381-386.
- Wetherall, J.A., G.H. Balazs, R.A. Tokunaga and M.Y.Y. Yong. 1993. Bycatch of marine turtles in north Pacific high-seas driftnet fisheries and impacts on the stocks. *International North Pacific Fisheries Commission Bulletin*, 53: 519-538.
- Whelan, C. L and J. Wyneken. 2007. Estimating predation levels and site-specific survival of hatchling loggerhead sea turtles (*Caretta caretta*) from south Florida beaches. *Copeia*, 2007: 745-754.
- William-Walls, N.J., J. O'Haea, R.M. Gallagher, D.F. Worth, B.D. Peery and J.R. Wilcox. 1983. Spatial and temporal trends of sea turtle nesting on Hutchinson Island, Florida, 1971-1979. *Bulletin of Marine Science*, 33: 55-66.
- Witherington, B.E. 1992. Behavioral responses of nesting sea turtles to artificial lighting. *Herpetologica*, 48: 31-39.
- Witherington, B.E., S. Hiram and A. Mosier. 2011. Sea turtle responses to barriers on their nesting beach. *Journal of Experimental Marine Biology and Ecology*, 401: 1-6.
- Witherington, B.E. and R.E. Martin. 1996. Understanding, assessing, and resolving light pollution problems on sea turtle nesting beaches. FMRI Technical Reports TR-2. Florida Marine Research Institute, St. Petersburg.
- Workman, W.B. and A.P. McCartney. 1998. Coast to coast: prehistoric maritime cultures in the North Pacific. *Arctic Anthropology*, 35: 361-370.
- Wyneken, J. and M. Salmon. 1992. Frenzy and postfrenzy swimming activity in loggerhead, green, and leatherback hatchling sea turtles. *Copeia*, 1992: 478-484.

# 10 民俗

ヒトとウミガメの関係史



藤井弘章

ウミガメは古くから人間にとって多様な民俗を生み出す生物であった。日本列島においても、数千年にわたり、南西諸島から北海道までの広範囲において、きわめて多様なかかわり方が存在した。とくに直接接触する機会がある沿海地域の人々は、ウミガメに関する知識を蓄積し、肉や卵、脂の食用のほか、甲羅の利用などを行ってきた。また、捕獲方法にもさまざまな工夫がみられた。一方で、ウミガメは神話や説話などに登場し、中国伝来の思想とも融合して神聖視されることがあった。沿海地域では、ウミガメの産卵を見守り、網などにかかった場合にも酒を飲ませて海に帰すという行為が行われてきた。あるいは、死んでいる場合に祭祀・供養したり、ウミガメがまとわりついていた流木を宝物のように考えて祀ることもあった。ウミガメを漁の神などとして食用を禁忌とする地域も多かった。これらのかかわり方は、同じ時代、同じ地域に同時に存在した場合もあるが、時代や地域によって偏差がある場合も多い。ウミガメとのかかわり方の歴史を示す資料は限られるが、民俗調査（聞き取りなど）を行うと、昭和時代初期から中期にみられた多様なウミガメの民俗が浮かび上がってくる。以下、ウミガメの回遊・産卵が多い地域から具体的にみていきたい。

## 10.1 日本列島各地におけるウミガメの民俗

### (1) 沖縄・奄美

南西諸島のうち奄美諸島以南の島々は、本土とは別の琉球文化圏を形成していた。狩猟採集が中心の生活が長かったこれらの島々からは多量のウミガメ遺体が出土するため、ウミガメは重要なタンパク源であったことがうかがえる。また、『おもろさうし』（12-17世紀の歌集）には、ジュゴンとウミガメを捕るという歌詞もみられる。琉球王朝時代、中国の冊封使（琉球国王即位に際して中国皇帝から派遣される正使）をもてなす歓待料理に、ジュゴンとともにアオウミガメが吸い物として出されたという記録もある。

沖縄本島北部（名護市辺野古、本部町崎本部など）には、ウミガメ捕獲のまねをする儀礼が現在も伝承されている（図10.1）。各集落において、神役がウミガメ・イルカ・魚などの海の生物と、イノシシなどの山の生物が捕れるようにという歌を謡い、若者たちがそれらを捕る所作をし、それらの豊漁を祈るという儀礼である。この儀礼は琉球王朝時代に起源があると思われる。

沖縄・奄美地方では、昭和50年代まではさかんにウミガメを捕獲していた。したがって、現在でもウミガメに対する民俗知識が豊富である。沖縄ではカーミー（カメ）といえ、ウミガメのことを指す。アオウミガメはミジガーミーやミジャー（水亀）、アカウミガメはアカガメ、タイマイはガラサーガーミーという。アオウミガメは炊くと水が出てくること、タイマイは口がカラス（ガラサー）に似ていることに由来した名前である。

ウミガメの産卵に関する知識も豊富であった。旧暦4月ごろから産卵する。満潮の夜に上がる。アカウミガメよりもアオウミガメのほうが産卵は遅い。アカショウビンが鳴くとウミガメが上がる（奄美大島、加計呂麻島）、などという民俗知識があった。また、足跡でアカウミガメとアオウミガメを区別もしていた。こうした知識は、ウミガメや卵がほしいために蓄積されたという性格もある。

卵は海からの恵みとしてごくふつうに食べられてきた。砂浜に残されたカメの足跡をたどって、砂浜に棒を突き刺しながら歩き、卵を探した。しかし、1穴全部を掘り採るのではなく、半分程度を残したという話もよく聞く。卵



図10.1 ウミガメ捕獲模倣儀礼（沖縄県名護市）。

は煮て食べることが多かったが、鶏の卵のように固まらないという。サツマイモのデンプンに混ぜて固め、餅のようにして食べることもあった。産卵場所の位置によって、その年の波が高いかどうかを判断することもあった。

産卵を待ち受けて、ウミガメをひっくり返して捕獲することもあった。この方法による捕獲は簡単であるため、漁民でなくても行うことができた。ただし、ある程度の技術は必要であった。産卵を終えて海へ帰るところを狙い、尻のほうに手を掛けて、前方に向けて斜めに返した。カメは手を張っているから縦には返らず、横に返とうとするとカメを海へ押しつけていだけになってしまうという。旧暦8日から15日ごろの明るい月夜を選び、「今日はカメ捕り日だ」などといって出かけることが多かった。浜の奥に群生するアダンの陰で寝転がってカメを待っていることもあった。産卵を終えたカメを狙うという言い伝えもあった。「アガリガメ（上がり亀）は捕るものではない、サガリガメ（下がり亀）を捕りなさい」という言葉も聞かれる（名護市）。同様の言い伝えは、沖縄・奄美地方で広く語られる。海へ帰るところを返すのは、下りになっているので返しやすいという物理的な理由や、産んだ卵も採

りたいという理由もあるという。ただし、卵を産ませてから捕獲することにより、ウミガメの資源を守るという意味合いもあったと思われる。めずらしい習俗としては、カメを返すとき、罰があたらないようにするため死んだ人の名前を名乗る、ということもあった（奄美大島）。

また、潜水漁を得意とする糸満の漁民などは、潜水してアオウミガメを捕獲した。アオウミガメは1年中近海にいたので年中捕獲できるが、4-7月ごろが捕獲の最盛期であった。アオウミガメは昼には海底の岩場（カーミノヤ、カメの家）で寝ていることが多い。そこをめがけて潜って捕る場合のほか、夕方に海藻を食べるために浅瀬にきたところを狙う場合もあった。アオウミガメをみつけると、後ろから近づき、首に鉤（カーミージー）を掛ける。鉤にはロープがつけられているため、カメが疲れるまで泳がせておき、カメが疲れてきたところにロープをたぐりよせて船へ上げた。こうした方法をカーミーカケ（亀掛け）という。素手でカメの甲羅をつかんで、尻を足で押さえ、頭を海面に向けて一緒に泳いで船へ上げたという人もいる。八重山ではスナカリヤという方法でウミガメを追いかけた。これは、1人が船の舵を取り、1人が潜水してカメを追うという方法である。こうした方法はだれでもできるものではない。奄美大島では、潜水でアオウミガメを捕獲するのは、糸満漁民か、糸満へ修行に行っていた奄美漁民か、糸満漁民から習った奄美の漁民、のいずれかであった。奄美大島では、カツオ漁船において、船上から鉛でアカウミガメを突き捕ることもあった。沖永良部島では、泳ぎながら針のついた鉛を沈めて、アオウミガメを引っ掛けて捕るという方法もあった。沖縄本島では、3月の交尾期に、板を投げてカメに抱き着かせてロープでくくって捕ることもあった。

産卵地周辺では、砂浜で捕獲したウミガメを食用としていたが、糸満の女性たちが、「カーミノシシ、コーランナー（カメの肉買わないか）」などといいながら、頭にカメ肉や魚を載せて那覇市内まで売り歩くことがあった。肉だけでなく内臓なども混ぜて販売していた。肉などを藁や竹に刺して売ることもあった。とくに珍重されたのは旧暦6月である。この時期には薬（とくに胃腸や喘息の薬など）としてアオウミガメを食べた。この時期になると、内陸部の人々も糸満などの漁村から肉を売りにくるのを待ったという。

食べ方は汁物にすることが多かった。水も入れずに炊く（体内から水が出

てだしになる）、味噌で炊く、などがあった。臭い消しとしてフーチバ（ヨモギ）を入れることもあった。血と肉を炒め物（チイリチャー）にもした。沖縄ではアオウミガメは刺身で食べることもあった。妊婦や出産後にカメを食べさせるとよいという。血は肺病や血圧の薬になるといい、解体時に生で飲む人もいた。脂は傷薬にも使った。

沖縄・奄美では、漁民が捕獲したタイマイやアオウミガメは剥製業者が剥製にして販売することもさかんであった。土産物として販売されるほか、地元では新築祝いなどに際して、ウミガメの剥製を贈る習慣があった。剥製は昭和40-50年代に流行したため、この時期には沖縄・奄美でのアオウミガメ、タイマイの捕獲が急激に増加し、肉の販売も増加した。

産卵時にウミガメが涙を流すことに対して共感をすることもあった。また、子ガメが孵化して海へ戻るときには、布を敷くなどした人もいる。ウミガメを食べない家系の伝承も伝わっている。琉球王朝の歴史書『球陽』には、中国皇帝への使者団が遭難した際、蔡讓という人物が1匹の「大亀」に背負われ、2匹のフカに支えられて無事に任務を終えて帰国したため、蔡讓の子孫は絶対にウミガメとサメの肉を食べないと記されている。類似の伝承は現在でも沖縄各地に伝承されている。とくに沖縄本島に集中的に分布している。

沖縄・奄美地方では、本土のようにウミガメに酒を飲ませて放す、埋葬して供養塔をつくる、ウミガメがまとわりついている流木を祀る、などの習俗はみられない。ただし、ウミガメの甲羅に文字を書いて放すという行為は行われることがあった。

## （2）薩南諸島・九州南部

種了島にはウミガメのことと魚の種類という意味でカメノイシ（亀の魚）といい、魚類の仲間として食用にしてきた。クロガメ（アオウミガメ）とアカガメ（アカウミガメ）を区別し、南部ではアカウミガメ、北部ではアオウミガメを好む傾向がある。北部西海岸（西之表市）では、馬毛島周辺でアオウミガメを釣りによって捕獲した。これは、ウミガメの肉を正月の魚として販売するためであった。この海域でもアオウミガメのいる岩場（カメゾネ）が知られている。夏場のトビウオ漁の時期、ここへ潜って捕獲することもあった。北部東海岸（西之表市）では、夏のテングサ採りが終わった時期



図10.2 ウミガメの卵を売り歩く少年たち  
(鹿児島県屋久島町栗生、昭和38年ごろ、屋久島  
うみがめ館提供)。

に共同でアオウミガメを捕獲した。これは、船を2艘出して網を張り、潜水によってアオウミガメを追い込んで捕獲するという方法であった。一方、南種子町荃永では、春の浦祭りで人々に振る舞うために、船上からアカウミガメを鉾で突いて捕獲した。カメの心臓をエビスに供え、周辺地域の人々も招いて浜でウミガメの肉を共食していた。この行事は漁の祈願が目的であるが、海の彼方からやってくるアカウミガメを食べることで稲の豊作も祈っていたようである。種子島では、交尾期のカメをフタツガメといい、雌を突くと雄も捕れるという。また、南種子町では食用後のウミガメの甲羅を、田の整地のときに土を入れて馬に曳かせることもあった。種子島での食べ方は、味噌や砂糖で味付けして炊くことが多く、臭い消しとしてセリを入れた。荃永の浦祭りでは、水炊きして、塩やしょうゆをつけて食べた。血は食用以外に、漁網の染料にも使用した。

種子島以外では、佐多岬周辺でもアカウミガメを鉾で突いて捕獲した。屋



図10.3 先祖が助けられたためにウミガメを食べない羽生家の家紋。

久島は昭和時代にはウミガメの食用は限られていたが、産卵の多かった永田、栗生では卵を採っていた(図10.2)。これらの集落では、昭和40年代まで、子どもたちが産卵時期の夜に砂浜で番をして卵を掘り採り、集落の家々に卵を販売し、その収益で学校の備品などを買いそろえていた。

佐多岬以外の鹿児島県本土では、少なくとも昭和時代にはウミガメを食べない地域が広がっていた。種子島、屋久島では、沖縄と同じく、先祖がウミガメに助けられたのでウミガメを食べないという家系の伝承もみられる(図10.3)。鹿児島県本土などのウミガメを食べない地域では、生きたウミガメが定置網などに入ると、焼酎を飲ませて海に放した。種子島でも南部の西海岸などはウミガメを食べなかった。死んだウミガメを祭祀・供養する習俗は天草南部の長島などにあるが、その事例は限られている。屋久島の栗生には、ウミガメがまとわりついた流木を拾い上げると「魚」になる、という習俗もみられる。

### (3) 九州北中部

古代、対馬、壱岐では、伊豆諸島などとともに、ウミガメの甲羅を焼いて占う亀卜が行われた。対馬、壱岐からは占いに使用した甲羅(卜甲)も出土している。占いをする卜部<sup>うらべ</sup>という人々は、奈良・平安時代には、対馬、壱岐、伊豆から朝廷に召し出されていた。卜部とは、潜水漁を得意とし、アオウミガメを捕獲する技術をもった海の民であったと思われる。対馬ではウミガメ捕獲を卜部に限ったため、ウミガメは捕獲してはいけないもの、という意識が江戸時代には広まっており、ウミガメ捕獲のタブー視につながった。大正時代以降、卜部のウミガメ捕獲も行われていない。

江戸時代の長崎では、輸入されるべつ甲をもとにしたべつ甲細工がさかんになった。江戸時代には、平戸付近の捕鯨者が灯油を採るため、ヤサバ(オサガメ)の捕獲を行っていた。

この地方では、昭和時代になってからウミガメを食用とする地域は佐賀県北部ぐらいであり、全体としては産卵を見守る習俗が広がっていた(図10.4)。産卵は見守ってカメを捕らなくても、卵は薬用として食べたという地域も多い。産卵を見守る地域でも、カメは「おっかない」という感覚もあった。有明海周辺、長崎県の壱岐、平戸周辺、大分県臼杵市では、死んだウ



図 10.4 産卵時に上陸したウミガメに乗る子ども  
(熊本県長洲町、平成5年、海ガメを呼び戻す会提供)。

ミガメを祭祀・供養した習俗もみられる。この地方でも、生きたウミガメが定置網に入ると酒を飲ませて放した。産卵したカメに酒を飲ませたところもある。ウミガメがまとわりつく流木を祀る習俗も対馬の一部にみられる。

#### (4) 四国南部

愛媛県南部、高知県、徳島県南部では、アカウミガメを捕獲してきた。明治時代には、愛媛県南部の漁民は瀬戸内海方面まで出漁して、銚子による突き捕りでウミガメを捕獲している。高知県では、ほぼ全域において船上からの銚子による突き捕りでアカウミガメを捕獲してきた。カツオ漁のときにカメに出会うと喜んで捕獲し、逃がすと漁がなくなるといった。室戸、足摺では定置網でも捕獲した。しかし、産卵のために上陸したウミガメを捕ることはあまりなかった。ヤツボネ(オサガメ)は特別視して捕獲しなかった。大漁を願って、食用後の頭や甲羅を神社や浜に埋葬したり、酒などをかけて海へ流すこともあった。シデ(手)を船霊に供えることもあった。その年の初めに



図 10.5 床の間に祀られたカメノウキギ(徳島県海陽町)。

定置網に入ったウミガメには、酒を飲ませて放す場合もあった。

どの部分がおいしいかは好き好きであったが、「ヤウチ(喉)、ハラダ(腹回り)、シデ(手)うまい」という言葉もある。室戸、足摺では夏のカメは臭くて食べないといい、冬に捕ったカメを食べてきた。食べ方は、味噌煮が一般的で、臭い消しとしてショウガなどを入れた。魚がないからカメ食べる、魚があったからカメを食べる、などという。不漁や大漁の際にカメを食べるという意識がある。また、田植えが終わってドロオトシ(田植え祝いの行事)のときにもカメを食べた。カメを食べるとムカデが寄ってきた。稲刈りの際に、甲羅に稲束を載せるなどして利用することもあった(室戸市)。

高知県南西部には、先祖がウミガメに乗ってきたので、ウミガメを食べないという家系の伝承もある。また、食べる地域であっても、ウミガメを買ってまで逃がす人もいた。高知県南国市では、明治時代にウミガメを祀り、流行神になったこともあった。徳島県海陽町鞆浦などでは、ウミガメがまとわりつく流木を拾い上げる習俗がみられる。流木はカメノウキギ(亀の浮木)。

カメノセオイギ（亀の背負い木）などよばれる。鞆浦では流木は床の間に祀るか、一部を漁船の船霊のご神体として祀る（図10.5）。カメから流木を取り上げる際には、必ず代わりの木を投げ入れるという。

### （5）瀬戸内海周辺

『日本霊異記』や『今昔物語集』に記載されるウミガメの報恩説話は、いずれも瀬戸内海を舞台にしたものであった。一方で、中世都市の草戸千軒町（広島県）などでは食用になっていた。江戸時代の大坂の道修町からは、薬として使用されたと思われるウミガメの甲羅が出土している。江戸時代には卵も食用としていた。明治時代には、岡山県瀬戸内市でタイマイを捕獲していたという。

瀬戸内海沿岸では、死んだウミガメを供養する習俗が広がっている。全域でみられるが、とくに香川県や兵庫県の淡路島に集中的に分布している。香川県丸亀市には明治時代の供養塔がある。神戸市にも供養塔がある。ウミガメがまとわりついていた流木を拾い上げる習俗は、香川県高松市に江戸時代、兵庫県南あわじ市に明治時代の事例がある。この地方でも、生きたウミガメが定置網に入ると酒を飲ませて放した。ウミガメの産卵する場所によって、波の高さを知るといふ民俗知識もある。浜の奥で産卵すると、その年は高い波がくるといふものである。江戸時代には瀬戸内海（兵庫県高砂市）でもこの知識があった。昭和時代初期には淡路島で、産卵した場所にロープを張って卵を守ることもあった。

### （6）紀伊半島

弥生、古墳時代の遺跡からウミガメ遺体が出土する。熊野三山の縁起には、権現祭祀を創始した人物がウミガメを突いて熊野速玉大社の神に奉ったとある。江戸時代には、田辺の漁民がさかんにウミガメ漁を行っている。この時期、「亀肉」は田辺の産物となっていた。甲羅は農具として大坂方面に販売するほか、べっ甲の材料として販売することもあった。脂も灯油として販売している。江戸時代、田辺の「亀漁」には、組織的に行うものと、個人で行うものがあった。組織的に行うものは、串本方面や徳島県方面まで出かけて捕獲している。個人で行う場合は、周辺の産卵地に出かけ、上陸したウミガ

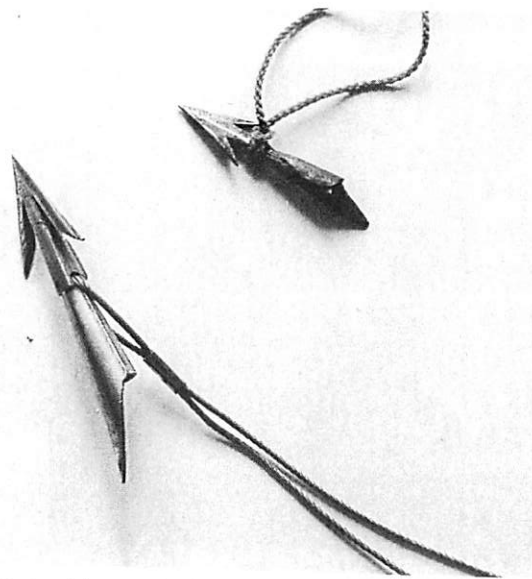


図10.6 アカウミガメを突く鉤(和歌山県新宮市)。

メをひっくり返して捕獲している。産卵期のアカウミガメ捕獲とともに、冬場には釣りによるアオウミガメ捕獲も行われていた。江戸時代末期には、田辺（紀伊藩の支藩）の領主から「亀漁」は禁じられるが、明治時代末期まで商業的なウミガメ漁は継続している。周辺住民からウミガメ食に対する忌避観念が広まったこともあり、昭和時代になると漁民が食べるだけのために突き捕りが行われるようになった。この時期に、アオウミガメではなくアカウミガメを捕獲していた。

江戸時代から昭和時代までカメ突きのポイントとして知られていたのは潮岬であった。潮岬の下は、5、6月の潮が速いときにウミガメがよく浮くため、明治時代にも串本、大島など周辺の漁村からカメ突きに漁船が集まった。ここでは江戸時代から漁民たち自身で、カツオ漁の妨げにならないよう、この時期のカメ突き規制を行っている。潮岬のカメ突きは商売目的ではなかった。漁のない暇などに行うもので、スリルをともなった楽しみであったと語られる。ここで狙うのはアカウミガメであった（図10.6）。カツオ漁船が沖合でアカウミガメを突いてくることもあった。紀伊半島でも交尾期のカメ

は捕りやすいという。「カメをみつけたら捕らんことには漁せん」「逃がしたら漁せん」などといわれ、ウミガメを捕って食べることは、カツオなどの大漁と結びついた重要な行為であった。昭和時代になると、海上のウミガメは捕獲しても、産卵のために上陸したカメを捕ることは禁忌とする地域もみられた。紀伊半島南部では、アカガメ、イソガメ（アオウミガメ）、アサヒガメ（アオウミガメ）の3種が認識されている。このうち昭和時代に好んで食べたのはアカウミガメであった。捕獲したウミガメは浜で共食することが多かった。紀伊半島でもオサガメは捕獲しなかった。

解体の際には、涙をみないように頭に桶などを被せることや、噛まれないように薪を噛ませておくこともあった。食べ方は、水だけで炊く、砂糖とネギを入れてすき焼きにする、などがあった。肉はドギ（脂）と一緒に炊かないとおいしくないという。酒をもち寄って、浜などで竹の串でつつきながら共食することが多かった。カメを食べると臭いがつく、ムカデが寄ってくる、などといい、家のなかで食べることを嫌うこともある。妊婦は食べてはいけない、妻が妊娠中の者は突かない、解体しない、などという。

頭は船主の家の床の間に飾ることもあった。甲羅は、酒、米、塩などをつけて、船上から海へ流すという儀礼も行われていた。このときには、「ツイヨ（海の神へのよびかけの言葉）、また捕らせよ」などと声をかけた。魚の大漁とウミガメの再生を願った儀礼である。甲羅は肥料にもなる。漁村には周辺の農村から甲羅をもらい受けにきた。甲羅は水田の害虫除けにも使われた。田の水口に甲羅を置いておき、その上を通った水が脂とともに田に入ることによって、害虫除けにするという使い方であった。

ただし、紀伊半島南部には、ウミガメを食べる集落と、食べない集落が混在する。それがこの地方の特徴である。また、和歌山県北部や中部では、江戸時代からウミガメを食べることはなかったようである。田辺以北では、ウミガメは漁の神、龍宮様などといわれ、死んだウミガメを供養する習俗や、ウミガメとともにある流木（カメノウキギ、カメノマワシボウ）を拾い上げる習俗が広がっている。和歌山市雑賀崎には天保9（1838）年の流木が現存する。ウミガメを食べない地域では、生きたウミガメが定置網に入ると酒を飲ませて放した。カメは振り返って礼をいいながら帰るといふ。売品でも捕らない集落もあり、さかんに捕る集落でも買ってまでウミガメを放す人もい



図 10.7 江戸時代に建てられたウミガメの墓(静岡県浜松市)。

た。明治時代には、田辺の仏教者が中心となって、漁民からウミガメを買い取り、甲羅に「南無阿弥陀仏」と朱書きして海に放したという事例がある。串本町には江戸時代の供養塔もある。

産卵地では、産卵場所で波の高さを判断する、産卵を見守るときに子どもが話をすることを禁じる、産卵を終えたカメに酒を飲ませる、などの習俗があった。ウミガメが流す涙をみて、出産に苦しんでいる、という言い方もされる。子どもをカメの背中に乗せることもあった。こうした産卵地での習俗は、南部も含めて紀伊半島全域でみられた。とくに産卵場所で波の高さを判断する習俗は、食べる地域、食べない地域ともにみられた。

### (7) 東海地方

縄文時代には三河湾周辺からも多数のウミガメ遺体が出土し、江戸時代には御前崎でもウミガメを捕っていたが、昭和時代になると食用とする地域はほとんどなかった。

ウミガメの供養習俗は、愛知県の知多半島、遠州灘から伊豆半島に集中的



にみられる。浜松市、御前崎市には、江戸時代の供養塔もある(図10.7)。知多半島では、明治時代末期、甲羅に三重県伊賀上野の住人の名前が書かれたウミガメが漂着し、それを埋葬したところ、霊験あらたかなオカメサンとして信仰されるようになった。こうした影響もあって、知多半島では寺院などでウミガメの供養塔を建立している事例が多くみられる。漁民の場合は、生きているウミガメが定置網に入ると酒を飲ませて放し、死んでいるカメをみつけると、崇られないためにもち帰って埋葬・供養した。また、御前崎にはウミガメとともにある流木を拾い上げる習俗もみられる。ここでは、この流木のことをカメノマクラ(亀の枕)という。流木は船主の庭や自船の船着場に立てた。御前崎周辺では、浜を掘って卵の位置を確認して波の高さを判断し、それより上まで船を引き上げた。

### (8) 伊豆諸島・小笠原諸島

伊豆諸島ではウミガメは貴重な食料であった(図10.8)。江戸時代の飢饉のときにはウミガメを食べてしのいだといい、新島では「腰巻を質に入れてでもカメを食べろ」という言葉が伝わっている。新島ではカメの大きさを、運ぶ人数によってヨツリモチ(4人持ち)などといった。ヨツリモチのカメがいると、集落全体が1食分助かると語られる。昭和時代にも、利島以南でウミガメを食べていた。大島では明治時代にウミガメを捕獲しているが、昭和時代には確認できない。新島ではアオウミガメとアカウミガメ、神津島ではアカウミガメ、三宅島、御蔵島、八丈島ではアオウミガメを捕獲していた。八丈島ではアオウミガメのことをホンガメという。八丈島では明治時代まで亀トが行われていた。

新島の若郷では、夏場に大掛網(追い込み網)にウミガメがよく入ったために潜水で捕獲した。アオウミガメのほうが多かったという。新島や神津島では、昭和時代以前には、6、7月ごろに槽漕ぎの船でカメコギ(亀漕ぎ)に出かけ、鉞で突き捕ることもあった。新島ではカメを捕るとめでたい、という感覚もあった。新島では和歌山県南部と同様、食用後の甲羅を海に流す儀礼もあった。新島、神津島では酒を飲ませて放すこともあり、小さいカメの場合には甲羅に「大漁満足」などと書いて放した。新島ではウミガメを捕ることがすべての漁のクチアケ(解禁)になり、心臓を船主の家の屋根越し

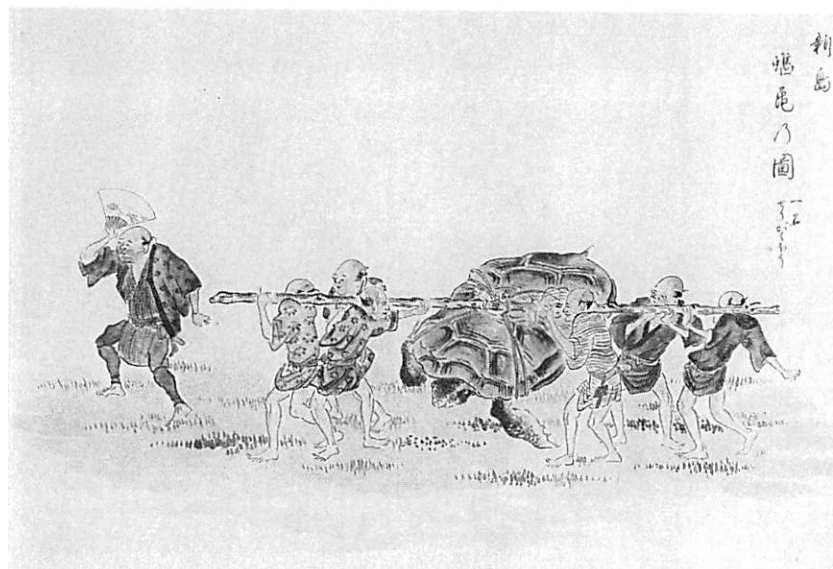


図10.8 「伊豆七島絵図」に描かれたウミガメ捕獲の図(東京都中央図書館所蔵)。

に投げることもあった。頭を神に捧げることもあった。新島ではしょうゆや味噌を入れて炊き、アシタバを入れて臭い消しとした。カメが捕れたというと、女性たちはアシタバを採りにいった。とくに新島若郷では、売るという感覚はなく平等に分けた。血も長生きのためなどに飲んだ。

八丈島では、春から秋にかけての時期に潜水で鉞を突いてアオウミガメを捕獲した。これをカメオイ(亀追い)という。潜水によるウミガメ捕獲は江戸時代の記録でも確認できる。カメが寝ている岩場(タラガリバ、座っている場所)へ潜って捕獲する場合、夕方浅瀬に海藻を食べにくるところを狙う場合があった。テッポウ魚がさかんであった末吉では、8月終わりごろのテングサ採りが一段落した時期に行うもので、楽しみであったという。岸から沖まで20人ほど並んで泳ぎ、カメをみつけると鉞で突いた。大賀郷では、不漁のときに行うショマツリ(潮祭り)や、正月などにはカメ肉を保存しておいて食べた。カメ肉を食べることは縁起を担ぐ意味もあり、長生きのために食べるという意識もあった。食べ方は水も入れずに炊き、塩をつけて食べるか、味噌を入れたカメ汁をつくった。八丈島ではカメ肉を販売することも

あった。血も血圧の低い人などが飲んだ。

小笠原諸島では、明治時代以来、人工孵化放流を行ってきた。アオウミガメを船上から鉆で突いて捕獲している。小笠原諸島では水を入れずに炊くことが多い。現在もアオウミガメの缶詰を販売し、島の食堂でも通常のメニューで提供されている。

### (9) 関東

縄文時代には、東京湾周辺でもウミガメ遺体が多数出土する。江戸時代には、江戸城坂下門外でウミガメ肉を売る者がいた。しかし、昭和時代になると、ウミガメを捕獲することはなくなっていた。

死んだウミガメの供養習俗は、神奈川県一帯、千葉県の外房、茨城県に点在する。千葉県鴨川市には江戸時代の供養塔がある。千葉県銚子市には明治時代以降の供養塔が密集している。ここでは明治時代末期にウミガメの祟りで船が転覆したという言説が広まり、それがもとでウミガメを怒らせては漁がなくなるという畏怖が生まれ、最近でも供養塔は建立されている。また、千葉県南部や銚子市には、流木（カメノマクラ）の習俗も伝わっている。関東一帯では、定置網に入ったカメに酒を飲ませて放すことも行われている。

### (10) 日本海沿岸

京都府の丹後地方には浦島伝説があるものの、ウミガメとのかかわりは太平洋岸に比べて少ない。昭和時代には、日本海側でウミガメを食べることはほとんどなかった。祭祀・供養の習俗は、山口県長門地方、鳥取県西部、兵庫県但馬地方、新潟県に点在する。とくに、山口県萩市周辺と新潟県の佐渡島には集中的に分布している。萩周辺には、カメ形石造物の上に地蔵が乗る「亀地蔵」が多数分布する。鳥取県境港市、兵庫県豊岡市、新潟県佐渡市には江戸時代の供養塔がある。佐渡にはウミガメの甲羅をご神体にして祀っている祠もある。山形県、秋田県では、甲羅や剥製を神社に奉納する場合があった。

### (11) 東北地方太平洋沿岸

ウミガメの産卵もなく、ウミガメと接触する機会は少ない地域である。ウミガメのことはカメとよぶだけである。昭和時代には、ウミガメを食べる地



図 10.9 祠に祀られたオサガメ(青森県大間町)。

域はなかった。ところが、ウミガメを神のように扱うことがある。三陸でさかんな大謀網（定置網）には、暖流と寒流の端境期で魚の少ない時期にカメが入るため、カメを吉兆として神様扱いするという。また、死んだカメを祭祀・供養する習俗は、福島県から青森県にかけて点在する。宮城県石巻市、岩手県釜石市には江戸時代の供養塔がある。石巻市網地島にある享保11(1726)年の供養塔は、筆者の調査では全国で最古のウミガメ供養塔である。下北半島の祭祀・供養習俗は、定置網に死んだウミガメがかかるようになってから、剥製にして漁民の家の床の間や神社に祀るという習俗が展開するようになったものである(図10.9)。

宮城県七ヶ浜町には江戸時代にウミガメを祀った「亀霊神社」が現存する。由来は以下のようなものであった。文化7(1810)年、七ヶ浜の沖合にウミガメが現れ、漁民はカメに酒を飲ませ、鉆で印をつけて放した。カメは何度も現れ、最後にはめずらしい貝を甲羅につけてきて死んでしまった。漁民は

このカメを丁重に葬り、神社を建立して祀り、カメがもってきた貝は現在も宝物として漁民の子孫がもち伝えている。

流木を祀る習俗も三陸一帯にみられる。青森県八戸市の危遊山浮木寺の本尊は、江戸時代にウミガメがもっていた流木で彫ったものであるという。三陸では定置網に入ったカメに酒を飲ませて放すことがあるが、その際に甲羅に船名などを記す場合も多い。

## (12) 北海道地方

北海道にはウミガメの回遊も少ないと思われる。しかし、アイヌ民族がウミガメを捕っていた痕跡が残されている。アイヌの場合は、さまざまな動物の霊を神の国に送るといった送り儀礼を行っている。アカウミガメも送り儀礼の対象になっていた。

## 10.2 ウミガメの民俗の特徴

具体的な事例からは、ウミガメとのかかわり方として、利用的側面と信仰的側面が存在したことがわかる。時代をさかのぼるほど利用的側面は強く、産卵がある地域ではごくふつうに肉や卵を食用にし、甲羅、脂をさまざまに利用してきた。しかし、同時に古くから信仰的な側面もみられた。利用と信仰は対立する場合もあったが、共存する場合もあった。大きな流れでいえば、利用がしだいに減少し、神聖視する傾向が強まって、現在の保護的なかかわりへとつながってきたといえよう。

ウミガメを特別視する傾向は、古代以来存在したようである。ウミガメの生態的な特徴、すなわち、海と陸を行き来する、定期的に海の彼方からやってくる、夜に上陸する、などが背景になっていると思われる。また、4本足である、涙を流す、などもほかの海洋生物と違うと認識された理由であろう。甲羅の存在も特徴的で、このために神仏の乗り物とされたり、海の彼方の神仏に願いを届けるために文字を記すこともできた。つまり、人々と海上他界を媒介する役割があると考えられたのである。古代以来沿海地域で存在したウミガメを特別視する認識に、カメを神聖視する中国から伝来した思想や、生物の殺生を戒める仏教などが融合することで、カメの神聖化が促進された。

また、貴族、武士、宗教者などは、文字による仏教などの知識をもとに、カメを神聖視し、都市部を中心にして庶民にもカメを縁起物とする認識が広まった。明治時代になると浦島伝説が国定教科書に掲載されるようになり、カメは大事にするべきもの、という考えは全国各地に一気に広まった。

反比例するように、食用などに利用する習俗は、時代とともに減少する。ウミガメの食習俗は、昭和時代中期までは南西諸島から太平洋沿岸において続いていたが、ワシントン条約を背景にした捕獲規制や、食料事情の向上、漁業人口の減少などによって、昭和50年代ごろから急速に衰退した。入れ替わるように、昭和40年代ごろから、各地の産卵地において、保護・観察活動がさかんになった。現在では、ウミガメの産卵を守ることを、砂浜環境の保全のシンボルとする意識も出ている。

ウミガメとのかかわり方は以上のように変化してきたが、同じ時代であっても、地域によってかなりの偏差があった。聞き取り調査によって確認可能な昭和時代初期の地域差を提示すると、日本列島のウミガメの民俗は大きく3つに分類することができる。図10.10のⅠ、Ⅱ、Ⅲがそれにあたる。それぞれの特徴にしたがって、Ⅰは利用心意優勢型、Ⅱは心意葛藤型、Ⅲは信仰心意優勢型と名付けておく。ただし、この分類の境界線は固定化されたものではなかった。捕獲・食用のラインは時代とともに南へと下がってきたといえる。また、昭和時代初期で区切ってみても、境界線は1本の線で分割されるものではなく、境界線の周辺には隣接する民俗との移行地帯が含まれている。なお、ⅠとⅡに広がるウミガメの捕獲・食用の民俗は、東京や大阪から考えると辺境地域に存在したものであるが、ウミガメがやってくる海原へと目を広げると、広くアジア・太平洋の島々へとつながっていたことがわかる。つまり、日本列島におけるⅠ、Ⅱのエリアは、太平洋地域におけるウミガメ捕獲・食用文化の北限という位置づけになる。

Ⅰはノオウミガメとアカウミガメを捕獲・食用にしてきた地域である。南西諸島、伊豆諸島に広がっていた。ここではノオウミガメ、アカウミガメ、タイマイの産卵があり、周辺海域でのウミガメの回遊も多い。潜水でアオウミガメを捕獲することが多く、アオウミガメが好まれた。昭和時代にもウミガメを食用にする頻度が高かった地域であり、肉や卵の販売も行われていた。特定の家でウミガメを食べないとする伝承はみられるが、全体としてウミガ

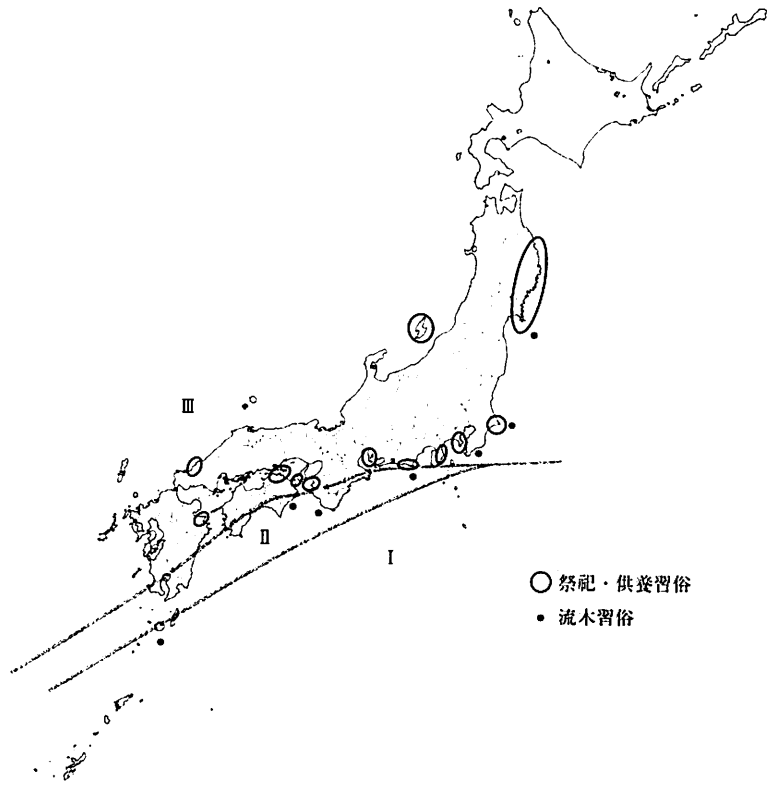


図 10.10 ウミガメの民俗分布図(昭和時代初期)。I：利用心意優勢型、II：心意葛藤型、III：信仰心意優勢型。

メを食べることに対する抵抗は少なかった。ウミガメを食べて中毒死することがあっても、中毒を起こすウミガメに注意するように、という警告が新聞などに出る程度で、ウミガメを食べることに対する差別意識や忌避の観念は起こりにくかった。したがって、このエリアを利用心意優勢型とした。

IIはアカウミガメを中心に捕獲・食用にしてきた地域である。九州南部、四国南部、紀伊半島南部に広がっていた。アカウミガメの産卵がみられる地域である。船上からアカウミガメを突き捕ることが多く、アカウミガメが好

まれた。カツオ漁などの端境期に慰労と娯楽をかねてカメ突きを行い、魚の大漁を願ってウミガメを食べるといった特徴もあった。昭和時代には販売されることは少なく、漁村や漁民以外ではあまり食する機会はなかった。ここでは食べる民俗と食べない民俗が混在しており、ウミガメの利用と信仰が葛藤するエリアであったといえる。したがって、このエリアを利用と信仰の心意が葛藤するという意味で、心意葛藤型と名付けた。ウミガメをさかんに食べてきた集落でも、食べることを嫌う人たちも多く、解体することに抵抗をおぼえる人たちも多かった。さかんに食べてきた漁村の隣に、食べることを嫌う漁村や農村や町が存在することもあった。なにか事件や事故が起こると、それはウミガメの祟りである、という言説が広まってウミガメを食べることをやめていったケースも多い。なお、IIのエリアで食べる民俗と食べない民俗を分けていた背景としては、地域の生業の違いも影響しているようである。つまり、釣り漁法などの攻撃的な漁法が中心の集落であれば、海上に浮いているウミガメを突き捕る場合が多いが、網漁のように受け身的な漁法を行っている集落では、沿岸に近寄ってくるウミガメを待ち受けて産卵を見守るなどの受け身的な民俗がみられる。

さて、IとIIはともにウミガメを捕獲・食用としてきた地域であるが、両者には上記のように相違点も認められる。IとIIの差異の背景としては、民俗全体として文化圏が異なるということも関係している。つまり、奄美諸島以南は琉球文化圏、薩南諸島以北はヤマト文化圏と、民俗が大きく異なっているのである。ミザの民俗もちょうど奄美大島と種子島・屋久島付近に境界が認められる。なお、両者の境界付近に位置する奄美大島、種子島、および伊豆諸島の新島にはIとIIの民俗が混在していた。琉球文化圏には仏教の影響が限定的であるため、ウミガメに限らず、野生動物に対する殺生の忌避観念が少なく、それらに対する供養という心意がほとんどない。それに対して、ヤマト文化圏の周縁に位置するIIでは、野生動物に対する殺生・肉食の忌避観念が中央から伝わってきたため、利用と信仰の葛藤がみられたということが考えられる。伊豆諸島についてはヤマト文化圏であるが、本土とは隔絶した離島であり、昭和時代になっても身のまわりから食料を得る必要があったため、ウミガメの食用に関しても抵抗が少なかったものと思われる。

また、ウミガメの生態的特徴と地域の生業の違いの影響している

ようである。つまり、アオウミガメはおとなしく、また、海底で休んでいることが多いために、潜水での捕獲が可能となる。Ⅰには糸満漁民など、潜水を得意とする漁民集団が存在したために、潜水によるアオウミガメ捕獲が可能となった。一方、アカウミガメは噛み付く恐れがあり、海上で浮かんでいるために、船上からの突き捕りが適していた。Ⅱにはカツオ漁がさかんな地域がある。カツオの回遊とアカウミガメの沿岸への接近は同じ時期であるため、カツオの群れを探しているときにアカウミガメを発見し、船上からの突き捕りが行われた。

Ⅲは、ウミガメを捕獲・食用としない地域であり、日本列島の大部分がここに含まれる。ウミガメの回遊・産卵に限られるため、カメに関心がないという場合もあるが、この地域では基本的にウミガメを捕獲・食用にすることは想定されていない。ウミガメと出会う機会が少ないために神様扱いしたり、縁起物とすることもあった。死んだウミガメを祭祀・供養する習俗はⅢに多い。クジラの供養などは捕獲した場合に行われるものであるが、ウミガメの場合は利用しないで、崇められないように、あるいは死んでいるのを憐れんで、祭祀・供養してきた。これがほかの生物とは大きく違う点である。Ⅱとの境界に近い地域に祭祀・供養習俗が多いのは、利用との葛藤のなかでウミガメを意識的に祭祀・供養するようになったためと推察される。また、ウミガメがもっている流木を拾い上げる習俗については、祭祀・供養習俗よりもⅡとの境界線により近い地域に点在していることがわかる。屋久島、徳島県、静岡県、千葉県などでは、ウミガメを捕獲していたものが、ウミガメを捕獲することをやめた代わりに、ウミガメの代替品としての流木を拾い上げて祀ることに変化していったと考えられるのである。

ところで、保護活動が始まったのはⅢではなくⅡが中心であった。Ⅱでは食べる、食べない、という民俗が混在し、葛藤する地域であったため、食べる人が多くいた反面、ウミガメを逃がす、守る、という行動をとる人も多かった。昭和40年代以降に保護活動が活発化する地域も、Ⅱを中心としてⅠやⅢとの境界付近の産卵地であった。それまでは個人的に行っていたウミガメ保護が、世界的な保護機運の高まりや自然環境全体への関心の高まりにあいまって、集落や自治体ごとに展開されるようになってきたのである。ウミガメの保護活動は、利用する習俗との葛藤のなかで育まれてきたということ

ができよう。

以上のように、ウミガメの民俗は時代や地域によって違いがあった。利用と信仰は対立する場合もあるが、共存している場合も多かった。特別視しながら利用する、守りながら利用するという知恵も存在したのである。これからのウミガメとのかかわり方を模索していくうえで、日本列島に展開してきた多様な民俗をみつめなおしておくことも必要であろう。

#### 参考文献

- 安藤学. 2001. 有明海の環境運動——荒尾市・海ガメを呼び戻す会. 九州看護福祉大学紀要, 3(1): 193-198.
- 石堂和博. 2012. 薩南諸島及び南九州における遺跡出土のウミガメについて. 民俗文化, 24: 印刷中.
- 宇田川洋. 2001. アイス考古学研究 序論. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 越中哲也. 1992. 玳瑁考——長崎のべつ甲を中心にして. 純心女子短期大学付属歴史資料博物館, 長崎.
- 大阪市立海洋博物館なにわの海の時空館(編). 2007. 海を巡った葉種——江戸時代のくすりと海運. 大阪市立海洋博物館なにわの海の時空館, 大阪.
- 柏常秋. 1954. 沖永良部島民俗誌. 凌雲文庫刊行会, 大阪.
- 堅田修. 1989. 亀報恩説話の展開. 大谷学報, 68(2): 1-13.
- 川崎晃稔. 1985. 海亀の民俗. 鹿児島民具, 6: 89-108.
- 川崎晃稔. 1990. 海亀の民俗. (大林太良ほか, 編: 海と列島文化5 隼人世界の島々) pp.431-448. 小学館, 東京.
- 川崎文昭. 1999. 生類憐み令と海亀の民俗——安間英男氏所蔵文書による. 常葉学園大学研究紀要(教育学部), 19: 1-17.
- 川島秀一. 2004. 東北太平洋岸のウミガメの民俗. 東北民俗, 38: 10-18.
- 川島秀一. 2005. カツオ漁. 法政大学出版局, 東京.
- 小島孝夫. 1995. ウミガメに関する漁撈習俗について. 千葉県地域民俗調査報告書, 2: 52-60.
- 小島孝夫. 2003. 漁業の近代化と漁撈儀礼の変容——千葉県銚子市川口神社ウミガメ埋葬習俗を事例に. 民俗学紀要, 23: 141-205.
- 小島孝夫(編). 2005. 海の民俗文化——漁撈習俗の伝播に関する実証的研究. 明石書店, 東京.
- 坂井隆・山村博幸. 2002. 亀甲——その製品普及と原料輸入. 考古学研究, 48(4): 65-77.
- 坂江涉. 2005. 古代の大阪湾にやって来ていたもの——ウミガメの上陸・産卵. 歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 3: 129-136(神戸).
- 坂江涉. 2006. 小豆島の「亀神社」とアカウミガメ. 歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 4: 160-164(神戸).

- 坂口一雄. 1980. 伊豆諸島民俗考. 未來社, 東京.
- 坂本正夫. 1994. 海亀の民俗. 土佐民俗, 62: 1-12.
- 下野敏見. 1980. 南西諸島の民俗 I. 法政大学出版局, 東京.
- 下野敏見. 1982. 種子島の民俗 I. 法政大学出版局, 東京.
- 末吉喜代一・吉松定昭. 2001. 新聞記事による香川県のウミガメ情報. 香川生物, 28: 15-22.
- 武田明. 1983. 漂着神の信仰. 四国民俗, 11: 1-7.
- 田辺悟. 1983. 相州の海神・漁神と船神(船靈)信仰(後). 横須賀市立博物館研究報告, 27: 15-33.
- 渡口初美. 1978. 琉球料理. 国際料理学院, 名古屋.
- 中園成生. 2004. 生月学講座——波戸漁民と生月島の定置網. 広報いきつき, 平成16年4月号: 8.
- 浪形早季子. 2004. 南西諸島のジュゴン・ウミガメ・イルカ・クジラ遺体. 動物考古学, 21: 73-89.
- 野本寛一. 1987. 生態民俗学序説. 白水社, 東京.
- 野本寛一. 1990. 熊野山海民俗考. 人文書院, 京都.
- 野本寛一. 1994. 共生のフォークロア——民俗の環境思想. 青土社, 東京.
- 橋口尚武. 1996. 伊豆諸島の海亀漁——その歴史と民俗. (劉茂源, 編: 国分直一博士米寿記念論文集ヒト・モノ・コトバの人類学) pp.267-282. 慶友社, 東京.
- 橋口尚武. 1988. 島の考古学——黒潮圏の伊豆諸島. 東京大学出版会, 東京.
- 橋口尚武. 2006. 食の民俗考古学. 同成社, 東京.
- 林晃平. 2001. 浦島伝説の研究. おうふう, 東京.
- 藤井弘章. 1998a. 和歌山県のウミガメの墓. 和歌山県立博物館研究紀要, 3: 74-82.
- 藤井弘章. 1998b. 紀伊半島南部におけるウミガメ漁とその食習俗. 日本民俗学, 215: 49-79.
- 藤井弘章. 1999. ウミガメと流木にまつわる漁撈習俗. エコソフィア, 4: 119-135.
- 藤井弘章. 2001. 地域差と時代差からみたウミガメの民俗——海村・離島追跡調査から. 成城大学民俗学研究所紀要, 25: 115-141.
- 藤井弘章. 2003. 海洋民研究における環境民俗学的視点. (増尾伸一郎・工藤健一・北條勝貴, 編: 環境と心性の文化史[下]環境と心性の葛藤) pp.184-197. 勉誠社, 東京.
- 藤井弘章. 2004. 沖縄のウミガメ捕獲儀礼と食習俗. (国学院大学日本文化研究所, 編: 東アジアにみる食とこころ) pp.189-228. おうふう, 東京.
- 藤井弘章. 2005. 知多半島のウミガメ埋葬・供養習俗. (名古屋民俗叢書4 生活環境の変化と民俗) pp.30-54. 名古屋民俗研究会, 名古屋.
- 藤井弘章. 2006a. ウミガメ捕獲習俗からみたト甲調達の地域と技術. (東アジア怪異学会, 編: 亀ト——歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす) pp.145-182. 臨川書店, 京都.
- 藤井弘章. 2006b. ウミガメの民俗5 江戸時代のウミガメ供養1——宮城県七

- ヶ浜町「亀霊神社」の成立. マリントーター, 9: 7-8.
- 藤井弘章. 2008. 対馬・壱岐におけるウミガメの民俗——亀トの里とウミガメ. 民俗文化, 20: 181-240.
- 藤井弘章. 2009a. 種子島のウミガメ漁. 民俗文化, 21: 219-303.
- 藤井弘章. 2009b. 動物食と動物供養. (中村生雄・三浦佑之, 編: 人と動物の日本史4 信仰のなかの動物たち) pp.223-240. 吉川弘文館, 東京.
- 藤井弘章. 2010a. 江戸時代の紀州における本草学者のウミガメ調査と漁民の民俗知識. 動物考古学, 27: 31-49.
- 藤井弘章. 2010b. 奄美のウミガメ漁——島の民俗知識と琉球・ヤマト文化圏との交流. 民俗文化, 22: 259-361.
- 藤井弘章. 2011. 隠岐・山陰沿岸のウミガメの民俗. 民俗文化, 23: 173-218.
- 藤井弘章. 2012a. ウミガメにまつわる報恩説話と禁忌伝承. 万葉古代学研究所年報, 10: 83-106.
- 藤井弘章. 2012b. 山口県のウミガメの民俗——長門地方の祭祀・供養習俗を中心に. 民俗文化, 24: 印刷中.
- 本田健二・斎藤行雄. 1983. 臼杵市の魚鱗塔等について. 臼杵史談, 74: 29-32.
- 本間義治. 1990. 佐渡島戸地海岸にある亀の墓. 両生爬虫類研究会誌, 39: 5-10.
- 本間義治. 1991. 五ヶ浜(新潟県西蒲原郡巻町)の亀塚. 新潟県生物教育研究会誌, 26: 55-56.
- 本間義治. 1993. 赤泊村大杉(佐渡島)にある亀の祠. 新潟県生物教育研究会誌, 28: 89-91.
- 本間義治. 2004. 【佐渡日報】に掲載されていた大亀捕獲の記録. うみがめニュースレター, 61: 40-41.
- 本間義治・石見喜一. 2001. 最近建立された“亀の碑”(佐渡赤泊村). 新潟県生物教育研究会誌, 36: 51-53.
- 本間義治・北見健彦. 1997. 佐渡相川町蓮長寺の“亀の碑”追記. 新潟県生物教育研究会誌, 32: 45-46.
- 本間義治・佐藤春雄. 1992. 佐渡島外海府にある亀の祠. 新潟県生物教育研究会誌, 27: 123-124.
- 本間義治・佐藤春雄・三浦啓作. 1992. 佐渡島相川町にある亀の碑. 両生爬虫類研究会誌, 41: 7-24.
- 本間義治・三浦啓作. 1994. 灯台もと啼し——相川町(佐渡島)にあった亀の墓. 新潟県生物教育研究会誌, 39: 61-62.
- 松井健. 2001. ツーナー・サブシステムと琉球の特殊動物——ジュゴンとウミガメ. 国立歴史民俗博物館研究報告, 87: 75-89.
- 三木誠. 1987. 小笠原のアオウミガメ漁業. 漁港, 29(4): 52-54.
- 宮田登. 1991. 黒潮と民俗信仰. (宮田登ほか, 編: 海と列島文化7 黒潮の道) pp.33. 小学館, 東京.
- 森本. 2000. 南知多の龍亀信仰. 南知多町誌補遺版, 3: 21-26.
- 横浜市歴史博物館(編). 2005. よこはまの浦島太郎. 横浜市歴史博物館, 横浜.